

## 広報 第100号 パート2

## のむら

2021年1月

令和3年

発行人 区長 長井通好  
 編集 広報紙編纂室  
 事務局 TEL.0795-23-4639  
 世帯数 2,991世帯(野村町)  
 17,301世帯(西脇市)  
 人口 7,343人(野村町)  
 39,871人(西脇市)  
 (1月1日現在)



第3分団の団員プラス3

## 第3分団消防車入魂式

野村町区長 長井 通好

昨年の11月1日に消防車新型車輛の入魂式を取り行ないました。新型車輛の導入は実に20年ぶりのことです。

消防活動には、火事などの消火活動と自然災害発生時の災害救助活動などがあります。皆様もご承知のとおり日本列島は災害列島とも呼ばれるよう毎年大きな災害に見舞われ、多くの犠牲者が出ております。近年では地球温暖化のため夏場の異常高温と乾燥による火災の発生、集中豪雨による水害発生など多くの災害が発生しています。その中で住民の生命と財産、生活を守るために先頭に立て活動しておられるのが消防団の団員の方々です。その活動範囲は広域に及んでおりその活動の性格上、迅速な対応が求められます。その任務を的確に遂行するためにはそれらに対応できる十分な装備と機動力を備えた消防車が必要不可欠だと思います。団員の方々に置かれましてはその職務を遂行するために普段より操法訓練、消防設備の点検など住民の安全のために自分たちの貴重な時間を犠牲にして日夜活動されていることをしっかりと野村町は認識しています。その中で、現在使われている野村部の消防車の車齢も20年に達し、十分な点検整備を施し丁寧に使用され、その勤めを立派に果たしてくれましたが何分機械のことですのでその性能の低下は否めません。そのため数年前より買い替えの希望を団員の方より伺つておりました。何分高価な装備品ですので野村町のほうでもその購入の補助を行政にお願いしていましたところ、昨年西脇市より購入希望の打診をうけ今日の運びとなりました。これにより消防団の活動能力も向上し地域住民の安全も高まるものと思います。遅れましたが、行政の財政も苦しい中このようないい支援いただけましたこと片山市長様には心よりお礼申し上げます。またわが身を危険にさらしても住民のために活動されている消防団員の方々にも心よりお礼申し上げます。野村町としましてはその活動に必要な援助は最優先で行って行きますので今後ともよろしくお願ひいたします。

# 寄稿ありがとうございました

100号の誕生日には何がいいかな、と腐心しておりました。思い付いたのがこれで、地域の先生方に祝辞をお願いしようかと。同僚の役員から、「よろそんな虫のいいお願いするわ。それでOKしてくれはつたん?」などと言われたが、皆さん心良く依頼にお応えいただきました。謝意を表わします。

それと、虫の良さは私の特性で、今更そんなことを言われてもね。しかししながら全員が私とねんごろな訳でもなく、中には話もしたことがない人もおられる。誰かに間に入つてもわらんとしゃあないな、と例の虫の良さを發揮して、藤田義和、村岡括矢両氏に仲介をお願いした。「よつしや、よつしや」と動いて頂きました。この場をかりて両氏にも感謝申し上げておきます。

ら敬意を表します。

全国的に人口減少や少子高齢化が進み、共助を担う地域コミュニティの役割がますます重要なものとなる中、野村町では運動会やいきいきサ

ロンといった交流事業をはじめ、文化や伝統を守り継承していく様々な活動に町民が一体となつて取り組まれています。

今後も、地域の歴史や伝統、そしてふるさとを想う心を次世代に受け継ぎ、地域資源を大切にした、安全で安心な地域づくりがますます進展することを心からお慶び申し上げます。

この度、広報「のむら」が記念すべき創刊100号を迎えるました。昭和58年の創刊以来37年の長きにわたり、野村町の様々な活動や魅力ある地域資源を丁寧な取材を重ね発信し続けて来られましたことに心か



片山 象三  
西脇市長

## 広報「のむら」創刊100号を祝して

# 広報のむら第100号及び新年記念号発行おめでとうございます



内閣府副大臣  
衆議院議員  
藤井比早之

## 広報のむら第100号及び新年記念号発行を祝つて



兵庫県議会議員  
内藤 兵衛

## 野村町広報第100号発行を祝つて

新年あけましておめでとうございます。皆様におかれましては、晴れやかな新春をご健勝でお迎えのことと存じます。

広報のむら第100号及び新年記念号の発行を心よりお慶び申し上げます。野村町の皆様の一番身近なニュース等をお知らせすることをモットーに昭和58年9月から発行されて第100号。長井区長様、歴代区長様はじめ関係者、野村町の皆様に心より敬意と感謝を申し上げます。

昨年9月菅義偉内閣の発足により内閣府副大臣を拝命いたしました。縦割り打破、行政改革、規制改革、デジタル改革、デジタル庁新設、情報通信技術（IT）政策、マイナンバー制度、沖縄及び北方対策等を担当いたします。地元野村町の皆様のおかげです。心より感謝申し上げます。

昨年は、新型コロナウイルス感染症の大が、皆様の暮らしにも大きな変化をもたらしました。テレワークの推奨、外出自粛の要請などで社会とのつながりが薄れていく中で、今年も閉塞感が拭えない年の始まりとなっています。

このような時代であるからこそ、これまで以上に地域や家族など、身近な方々とのつながりが重要となつてきます。ツールとしての役割の一翼を担っているの

地元のために全力を尽くしてまいります。これからもご指導賜りますようよろしくお願い申し上げます。  
野村町の皆様のご健勝ご多幸、野村町のご発展を心から祈念申し上げましてご挨拶とさせていただきます。



が、長年に渡り、発行されてきた広報誌ではないでしょうか。

内容を拝見させていただきますと、「野

村地区まちづくり計画」の策定経過をは

じめ、子どもからお年寄りまで様々な年

代の方々の活動状況や行事等が詳しく紹

介されており、大変興味深いものでした。

特に一昨年の祭りに参加した子どもたち

の感想からは、世代を超えた地域のつな

がりの大切さを感じとてくれたことが伝

わり、子どもたちのみならず、地区的将

来にとつて、地域・世代間交流は地域活性化の重要なファクターであると改めて認識したところであります。

このことからも、コロナ禍が一日も早く解消し、これまでにも増して地域活動が展開されることを願ってやみません。そのためにも、県の新型コロナウイルス感染症対策に対して積極的に提言を行い、皆様の生活の日常化と経済活動の回復を目指してまいります。

今後とも、広報誌が野村地区のまちづくりの役割を果たすべく、末永く発行されますこと、お住いの皆様方のご健勝を目指してまいります。

野村町のことが記事や写真でよく分かり、毎回、楽しく読ませていただいています。

令和2年は見えない大敵コロナウイルスとの戦いの年でした。生活スタイルもすっかり変わりました。一日も早く、コロナの収束を願うばかりです。昨年は、野村地区まちづくり2020の策定に参加し将来の野村町のあるべき姿を話し合い私も様々な提案をいたしました、冊子も作成されました、私は目標のひとつでもある「文教地区として子どもたちが安心・安全に暮らせる野村」に協力していくこうと思いました。そこで昨年から始めたのが小学生の登校時の見守りです。毎朝、家の前から学校のそばまで子どもたちと一緒に歩いて行きます、20分程度ですが、学校の様子や友だちのこと等いろんなことを話しながら行きます。大事な情報がいっぱいあります、子どもたちに寄り添っていきたいと思っています。さて、議員として仕事をさせていただき、2期8年目を迎えます「現場主義」をモットーに皆さまからのご意見ご提案を反映させるべく日々東奔西走しています。これからもよろしくお願ひします。野村町の益々の隆盛と、穏やかな年になりますよう心より祈念いたします。



西脇市議会議員  
浅田 康子

5区在住

## 広報のむら第100号 発刊おめでとうございます



西脇市議会議員  
坂部 武美

3区1班在住

## 広報「のむら」100号 記念特別号に寄せて



西脇市議会議員  
村岡 栄紀

1区在住

## 「広報のむら」第100号 発行によせて

広報「のむら」100号記念特別号の発行、おめでとうございます。

広報「のむら」には町民の皆さんのお顔が良く掲載されています。行政広報と違って町の広報は、読んでいただきたい記事も必要ですがほのぼのと親しみがある内容でよいと思います。野村町に移ってきて15年、皆さんのが支援で市議会議員に送り出していただき7年が経ちました。

議員として野村町に何が恩返しできるのか、そこに住む地域の課題や希望を行政に投げかけていくことが、まずは一番だと思います。私も関わらさせていただけた野村町が持つ課題や10年後の展望を示す「西脇市野村地区まちづくり計画2020『へその緒でつながるまち野村』」が昨年3月に出来上がりました。

公共交通の拠点・西脇市駅、小中高が揃う文教地区、加古川・野間川、野村大池などの良好な景観・環境など最早、野村町は西脇市の中心です。まちづくりをプロデュースする人と裏方の事務局も必要かもしれません、若い人たちの活動グループも出でています。西脇市を動かすのは野村町から。みなさんと一緒に野村町、そして西脇市を少しずつでも良くしていきましょう。

「広報のむら」第100号発行おめでとうございます。これまで編集・発行に尽力された皆様に感謝とお祝いを申し上げます。私は昭和36年に野村町で生まれ育ちました。幼少期には、今の野村公園のある場所に重春小学校があり、校庭でクラスのみんなとドッジボールをはじめ、ネット、二クダシ、ポッカン（存じでしようか？）など、疲れ知らずで遊んだものです。わが家の周囲も、田んぼや畑、広場がいっぱいです。でも友達と一緒にセミやトンボを追いかけて、鬼ごっこやかくれんぼ、缶けりに竹馬など、日が暮れるまで走り回っていました。家の近所に駄菓子屋さんがあり、母から貰ったお小遣いの10円玉数枚を握りしめ、いつもお店まで全力疾走したのも懐かしい想い出です。毎日がワクワク探しの大冒険。そして、あれから半世紀の月日が流れました。私自身は、今日も地域を走り回りました。自分が大きく変わる中、地域のために、自分ができることを誠心誠意、一生懸命やっていきますので、今後ともご指導よろしくお願い申上げます。

# 笑顔

魂式・どんど大会  
刀詣・茆植え  
ヨン・大掃除  
ソコンクラブ



どんど  
大会



習字  
教室

イルミ  
ネーション  
にしづきし駅

パソコン  
クラブ





# 野村町の

第三分団消防車入  
えべっさん・キ  
イルミネーシ  
習字教室・パ



## 今日は無難に 山の話

藤原和義

きつかけは何だったか忘れてしまったが70近くになつて山へ行くようになつた。

山行きと言つても年が年だから低山に登つたり山城跡を訪ねたりするトレッキングで、縦走や岩のぼりを専らにしている岳人から見たら児戯に等しいようなものだろうが。先づ近辺の山から初めて、播磨丹波の大山へは行つた。ちょっと自信がついてきたので、さあ全国区の山へ、と「槍穂高剣などとは言わないがせめて大山比叡六甲」などと戯れ歌を作つたりして、

### ◆比叡山

一等最初に選んだのは比叡山で、これはガイドブックに初心者向とあつたからで、手頃の山を選んだつもりだつた。比叡山はケルマで何度も行つたが歩いての登り下りは勿論初めてである。琵琶湖側から登つて京都側へ下りてくるコースを取つた。坂本の駅に降り立つとさすがにでかい！比叡山は低山だが（一五〇〇米以下を低山と言うんだそうです）山全体が大きいので横断の距離はかなりある。穴太衆積みの石垣を眺めながら歩いていると、日吉社の後背の山のかなり上方に目を引く建て物がある。遠目にも懸崖作りの立派な建造物である。私の記憶にはなかつたので最近建てたものかな、と思つたが、道行く人にたづねてみた。あれは日吉神社の奥宮で木を伐採したので下からも見えるようになりました、と言う。通り過ぎるか、登つてみるか、ちょっと迷つた。往復に一時間近くかかりそ

うだが、今度いつ来るかわからぬ。予定にはない道どとは規模が違うがしばらく見惚れる程の立派なもん

### ◆六甲

六甲は面白い山で一時はまつた。六甲山系というの

でした。さすが日吉社の奥宮でした。元のコースに戻り一時間程登ると「法然堂」というお堂がある。ああ法然さんもここで修業したんだつた。と気付いた。私は若い頃ちょっとだけ仏教に惹かれた時があつて、いろいろ本を読んだが、最澄空海はもとより、日蓮親鸞道元などは偉すぎてとても近付き難かつたが、何故か法然上人だけは私みたいな人間でも受け入れてくれる様な気がして親しみを持つた覚えがある。「法然堂」に立ち寄りお参りをさせてもらつた。延暦寺をゆつくり拝観する時間もなかつたのでそのまま広大な境内を通り抜けて比叡山の最高地点へ。三角点のある最高地点を特別に大比叡と呼ぶが八四八メートルの低山だし展望もなく期待した程ではなかつた。

ここまで体力の八割方消耗してしまつたので下りはロープウェイとケーブルを使うか迷つたがそれでは朝早く起きてここまで来た甲斐がない。それに下りだし、と高を括つたがこの下りがきつかった。30分程下つたところから始まるのが雲母坂である。京都から見るとこの辺りで雲がわくように見えるのでこの名があるが、この「きらら坂」という響きがいい。京都から比叡山に至る最短距離で、したがつて直登に近い急勾配で加えてかなり深いV字谷である。千日回峰の行者道もある。歴史の本なんかにも時々出てくる名前で私などは随分親しんだ名前だが目ににする、足にするのは初めてで想像以上の難所でありました。音羽川沿いの住宅地に下りてきた頃には立つてられない程膝が大笑いでいて有り合いのベンチにへたり込んだ。しばらく休んで帰路についたが、罰当りの私のことだ、振り返り比叡のお山に向つて「こ、これのどこが初心者コースじゃ！」と悪態をつくことを忘れなかつた。

阪急芦屋川駅から高級住宅街を抜けるとすぐに登山道で、道もよく整備されているので快適な登山である。一個所「岩梯子」という難所があるが何のことではない五百米程の本当に都会の裏山といつたところだが、下りで道を誤つた。目印にしていた鉄塔が随分違う方向にある。まあこのまま下ればどこかの谷に出て、谷筋を歩けば帰れるだろうと高を括つた。高を括るのは私の悪い癖である。どんどん茂みに入つたが、大きな木に結ばれたロープに気づいた。黒と黄色がねじられたよく見るナイロンロープが垂れ下つていて。これをつたつて行くんだと体重をかけたとたん、ロープが切れた。「ぬかつたな！」と思ったがそのまますべり落ちて、岩にしこたま背中を打つて止つた。息も出来ない程の痛みだつたがあの岩がなければどこまで落ちていたかわからない。成程こうやつて遭難するんだ、と納得はしたがあまりの痛みで動けない。一瞬、ほんの一瞬だが「もういいか、オレも70だ、ここで死んでもいいか」とそんな考えが頭をよぎつた。しかし、北アルプスでの滑落死なら人も同情してくれるだろうが六甲なんぞじゃ馬鹿にされるのが落ちだ、それは嫌だと思いつらシジリジリと動き出して木や草を手がかりにして元の場所へ這い上つた。下りの道を探し探し背中をかばいながらゆっくりと下つたが駅にたどりついた頃には日が落ちていた。次の日医者に行つてレントゲンと内臓の検査をしてもらつたが異常はなく打ち身という診断だつた。医者は「打ち身は日にち薬ですな」と言つたがその通りで治るまでに何か月もかかつた。あの事は文字通り命懸けのいい経験になつた。低山だからと言つてあなどつてはいけないと。

## 心筋梗塞に関する 健康講座



去年の10月に「地域医療を支える市民の会」の新谷千久男さんから、「健康出前講座」というのを野村町でやらしてくれないか、という申し入れがあつて、去年は恒例の町主催の「健康講演会」がコロナの影響で一度も開催されなかつたので、渡りに舟と二つ返事でお受けしました。ただし少人数で、という条件付きで。心筋梗塞に関する日頃からの心構えを教えていたく内容でしたが、現在この国はコロナ以外の病気はあってなきが如くの雰囲気であります、コロナ以外でも即命にかかるような病気は多々あります。心筋梗塞もその一つで時宜に叶つたお話であるように思いました。それで11月に3度に分けて講演が行なわれました。同会の事務局長の高瀬弘之さんがお話をされました。

まだまだ大人数が集まることは出来ませんが、小さいグループなんかでお話を聞きたいと云うことならば、いつでも行きますということですので皆さんもよろしくお願ひいたします。

## 役に立たない話

前の広報委員長だった前川さんから年賀状が来て、印刷文の余白に「本庄繁は二・二六事件の関係者でしたね」の書き込みがあつて私は「ああ、あの事か」と思い出した。いつぞやの広報に前川さんが「本庄繁敬書」を「本庄繁が書す」と読まれていたのを私が「本庄繁が敬書した」ですとメールで知らせたことがあって確か次の号で訂正せられた。「敬書」という言葉云々ではなく私が驚いたのは、今的人は本庄繁を知らないのか、ということだった。私らより一世代上の人ならばお馴染みの名前だらうと思う。本庄繁は丹波篠山の産で赫赫たる軍歴の持ち主で、ついには陸軍大将、男爵まで昇りつめた立志伝中の人物で昭和史の（狭義の昭和史は20年8月15日まででそれ以降は戦後史といつて区別します。ここではこの狭義の意味で使います）重大な場面に二度登場します。一つは満州事変の時で、事変の一ヶ月前に関東軍司令官として着任した。運がいいと言うのか悪いのか。その時点ですでに板垣征四郎、石原莞爾両参謀の間で謀略は着々と進められていた。この二人は当時陸軍もやりづらかったと思われる。二人に押し切られる格好で事は進んだ。派遣軍の独走である。関東軍という一万そ

こそここの派遣軍に国家全体が引きずり込まれたのである。犬がしつぽを振つたのである。以後敗戦までまつしぐらに突き進むのが昭和史の大好きな流れである。司馬遼太郎の言葉を借りれば、あの時代こういう「国家を駒にして起に対して始終一貫してその怒りの姿勢を崩さず断固討伐を命ぜられたが本庄は青年官長として天皇に近侍していた。天皇は決將校たちに同情的で、というのも本庄の娘婿の山口一太郎大尉が青年将校の協力者で崩さず断固討伐を命ぜられたが本庄は青年將校たちの心情もお計り願いたいと十三度にわたり奏上したが天皇の逆鱗に触れ平伏して退席したと、當時その場にいた人の手記に残つている。前川さんが年賀状に書かれていたのは多分この時の事だろう。ここらで止めますが、自分で言うのも何だが、年賀状の欄外の一行からここまで話をふくらませるのも一つの芸だな。とは言えこんな時代錯誤な何の役にも立たない話を何人の人が読んでくれるのか、知らんけど。

「しつぽが犬を振る」は英語の慣用句の、ワグザドッグ（Wag the dog）の直訳で本末転倒、主客転倒の意です。



野村町の祇園祭りは12月に行なわれる。元は11月23日に行なわれていた神農祭（新嘗祭）だったが、何かの都合で（恐らくイルミネーションの設置などの行事と重なつたせいかと思われる）一週間伸びて12月の第一日曜日に行なわれるようになった。私もそんなにこだわりがある訳ではなく小うるさく言いたくはないんだが、祇園祭と銘うつならば京都の御本社に合わせて7月にすべきだろうし、どうしても12月でなければいけないのなら一週間遅れの神農祭でいいと思う。師走に祇園祭なんて日本で野村町だけだと思う。それに二ヶ月後には全く同じ形式の初午の神事がある。ちょっと時間がつまり過ぎじゃないか？二月の初午祭、七月の祇園祭、十月の秋祭り、だと丁度いい間隔の神事になると思うんだが如何？



「100号パート2はするいやろ。101号やんか」と言われそうだが、そこは、「またあの人ジヨークだろう」と笑って許していただいて、さて、とにかくにもこんな粟粒みたいな自治体としては最小単位の野村町の広報誌が100号も続いたということはまことに希有なことで、私たち役員も町民も共に誇りにしていいと思います。これまで広報紙にたずさわってこられた諸先輩、寄稿などの協力いただいた町民の皆様に心からの感謝を申し上げます。

50号の時に（確か絹川さんが委員長の時だったが）神戸新聞に載った事がありました。やはり、市内の一地区の広報誌が50号も続いたことは希である、といったような記事だったと記憶しております。100号ならなおさらで、申し入れをしたら新聞記事にもなったかも知れませんが、何せこんな時期で、晴れがましいことは、と遠慮いたしました。

この先もこの広報紙が続していくことを希望しますが、これまでの広報誌に大きく欠けていたのは、女性の視点、そして若い人たちのものの見方で、私らみたいな年寄りがずっと広報に関って来たのでいた仕方ない面もありますが、これからは女性や若い人たちが関与できるものになれば広報もさらに文字通り広がりを持つようになるでしょう。後進に期待しています。

## 編集後記

副区長・広報 藤原 和義